

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
作曲	教授	寺井 尚久	全体的には、創立50周年関連の活動が多く、ハードな動きを強いられる場面も多々あったが、結果も含めて、十分な活動を行う事が出来た。
作曲	教授	久留 智之	研究活動においては国外でのレコーディングや初演等があったが新作制作面では小品が2曲となり、作品制作のための時間の確保が課題である。教育活動では作曲分野として3人目のドクターを輩出したことがトピックである。大学運営では人事案件が多く、外国人短期客員の本学の実情に沿った規約の整備が道半ばで今後の検討課題である。
作曲	教授	小林 聡	研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献のすべての分野に渡り、概ね、及第点には達していたと思う。研究活動にもう少し時間をかけられるよう、スケジュール調整にも気を配って行きたい。
作曲	准教授	山本 裕之	年々、教育および研究活動（作曲）の時間が思うように取れなくなっている中で、なんとか目標を達成している状況であるが、今後このペースを続けられるかどうかは楽観視できない。特に自分の研究活動は学生への模範となるよう心がけたいところであるが、作品を十分遂行する時間が絶対的に足りない。さらに、教育についても授業改善をしたいところは多々あるが、なかなかそれらに手を付けられ切れていない。これはきっと私だけの問題ではなく、個々の教員の努力が限界に達しつつある今、大学の質を向上させることが長期的に大学ブランドを高める最良の策であることを考えると、やはり各セクションの人員を増やして労力を分散させる以外に方法はないと感じる次第である。
音楽学	教授	増山 賢治	上述の通り、目標をすべて達成し、最終年度の準備も整えた。
音楽学	教授	井上 さつき	9月には50周年記念国際シンポジウム・レクチャーコンサートが成功したこと、そして、1月にはソルボンヌ大学とのコチュテル（博士論文共同指導）による初の学位審査が国内外から4名の専門家を迎えてつつがなく行われたことが最も特筆すべき成果であった。
音楽学	教授	安原 雅之	日常的に、さまざまな業務に追われている。それぞれの業務を、効率良くこなせるよう工夫して対処したい。
声楽	教授	戸山 俊樹	教育活動、大学運営、社会貢献に関しては、計画、目標を概ね達成した。 演奏活動の充実に関しては、目標を充分、達成したとは言えない。
声楽	教授	末吉 利行	研究、教育活動および大学運営、社会貢献とも、学生の技術向上、大学事業の成功、社会での大学認知度向上など予想以上に充実した成果をあげることができた。特筆すべきは2年半の準備期間を費やした大学創立50周年記念公演「ラ・ボエーム」の成功である。制作責任者とメインキャストを兼ね、演目の設定、予算計画に始まり、舞台美術、照明、衣裳の各プランのコーディネイトおよびキャスト、スタッフの選抜、児童合唱、合唱、オーケストラの練習スケジュール等まで、全ての責任を負いながら、メインキャスト（マルチェロ役）として演奏に参加し、公演を成功に導いたことは、最大の成果である。
声楽	教授	中巻 寛子	演奏、研究、教育、学務、いずれに関しても真摯に取り組み、一定の成果を上げることができたと思う。しかしながら、教育に関しては、年々、音楽を学ぶ事に対して明確な目的を持ち、それを踏まえた上での向上心を持った学生が減少する中、個々の学生の将来を見据えての最善の指導方針、内容を考えることが、ますます重要な課題となって来ていると感じている昨今である。

声楽	教授	森川 栄子	海外研修においては体調不良により十分な成果を挙げる事が出来なかったが、その他についてはおおむね予定通りに行えたと思う。特に教育活動の面においては、指導の成果を目に見える形として得ることができた。
声楽	准教授	川島 幸子	H28年度は、NHK・BSクラシック倶楽部の公開収録で名古屋大学の豊田講堂でのコンサートに出演し、愛知県立芸術大学の音楽学部の教員と共演出来、またこのコンサートは3年間にわたり全国で繰り返し放送されるので、大学の宣伝にもなると思う。また、東日本大震災以降、ドイツでは何度もチャリティーコンサートで演奏し、ドイツから義援金を送る活動をしてきたが、日本では一度もなかったため、今回、岩手県山田町でのチャリティーコンサートに出演出来、まだまだ復興が進まない山田町の様子に胸が痛んだが、コンサートに来てくださった方々には、ほんの束の間だが音楽を楽しんでいただけてよかったと思う。
声楽	准教授	初鹿野 剛	今年度の活動は何と言っても本学創立50周年の記念オペラ公演《ボエーム》が大きなウエイトを占めた。所属する声楽専攻のみならず、全学一丸となって取り組んだ中で、教員のひとりとしてキャストとして出演・SNSによる効果的な広報・制作（稽古進行等）に携わることが出来たのは本当に幸運なことであった。この経験を次年度以降の大学オペラ運営に生かしていきたい。
ピアノ	教授	松本 総一郎	本法法人化以降、大学運営や教育への負担が増え続けていく中で、如何にして自身の研究時間を捻出し、自分なりの成果を上げていくのか、大学業務との板挟みの中で試練の日々が続いている。
ピアノ	教授	熊谷 恵美子	自身の研究と教育、大学に関わる運営、社会貢献のどれも私にとっては大切なものであるが、どれも十分ではないのが現状である。特に教育面に関しては、研究との関わりを深めていきたいと考える。
ピアノ	教授	北住 淳	本学の教育研究方針に則った、芸術大学教員としての活動を継続している。多様な活動のそれぞれが別の活動に繋がって行くような、独自性と相互性の両立を続けていきたい。
ピアノ	教授	掛谷 勇三	年度はじめに行ったラフマニノフ作曲ピアノ二重奏作品全曲演奏会では共演者との綿密な準備の末、目標とする演奏ができ、関係誌上にて高い評価を得た。年度後半は認証評価委員としての膨大な作業に追われ、研究活動については全く時間をとれなかった。音楽学部施設整備委員長として検討すべき音楽学部の事案に取り組みなかつたため、次年度には検討を進めるため積極的な活動が必要。
ピアノ	准教授	内本 久美	教員として、学生の方々の勉強だけでなく、大学生活に関する事柄について可能な限りサポートできるように努力する。自己の研究に関しては、二度の海外での演奏会で成功をおさめることができ、国内でのリサイタルをはじめ、学内外での演奏会へ出演させて頂き、1年を通じて実りある研究を行うことができた。
ピアノ	准教授	鈴木 謙一郎	大学創立50周年という特別な節目の年に、様々な角度で大学と外の世界との接点を持つ事ができたのは意義深かったと感じている。とりわけ中経連の若手によるNext30でのコアメンバーとの会合は興味深く、互いに理解を深める事ができた。自分自身にとっては収穫であり、大学にとって多少なりとも何らかの意味があったとしたら嬉しい。NEXT30も含め、大学への理解促進活動については、最大限尽力したが、経験が浅く力が及ばない面もあったかも知れない。それについては今後の課題としたい。
ピアノ	准教授	中尾 純	激務の中、挑戦的な課題を設定し、同僚の暖かい協力を得て完遂することができた有意義な一年であった。次年度も積極的に取り組み、目先の成果や評価にとらわれず、長期的視野にたった専門性の向上、とりわけ内面的な深化に努めたい。

弦楽器	教授	百武 由紀	創立50周年の中心イベント（オーケストラ、オペラ）、名フィルとの合同演奏の中心に立ち、3公演を無事に、そして世の中へのアピールの手ごたえを感じつつ、終わることができた。
弦楽器	教授	福本 泰之	例年の研究・教育活動などに加え、大学創立50周年の記念行事等で特別忙しい年ではあったが、体調を崩すなどして学生やコースの教員などに迷惑をかけた時期があり、反省とともに改めて心身ともに自己管理が大切であると感じた。
弦楽器	教授	花崎 薫	今年度は愛知芸大50周年として数多くの記念事業に参加したが、オーケストラ公演、オペラ公演などを通じて改めて優れた卒業生の存在、また現役学生たちの質の高さを感じた。また学生のうちに大きな規模のオペラを経験することは希なことで、学生たちにとっては良い経験になった。室内楽の研究課題としては、今年度からベートーヴェンの最晩年の弦楽四重奏曲を3年計画でCD録音し、来年度再来年度へとつながる企画となる。弦楽器専攻で企画しているブラムスの室内楽シリーズも半ばを折り返し、コンサートの面でも充実した年度となった。
弦楽器	教授	白石 禮子	研究活動では、昨年度より行っているBrahms室内楽全曲演奏会シリーズや瀬戸内アートプロジェクト等の成功、教育活動でも、指導した学生が修了試験や学外コンクールにて優秀な成績を収める等、研究・教育の両面に於いて手ごたえのある成果を残した。社会貢献の部分でも、複数のコンクール審査員等の活動を行った。
弦楽器	准教授	桐山 建志	創立50周年ということもあり例年より多忙であったが、概ね計画通り進められた。特に研究活動では、CD録音などで大きな成果が得られた。
管打楽器	准教授	倉田 寛	今年度含め、私自身が本学に携わる事に於いて大きな目標として掲げている事は、常に研究活動（演奏）、教育、運営、社会貢献のバランスが取れていることです。特に社会貢献に於いては、近隣地域のコンクール審査員中高校生を対象とした演奏会クリニックなどを積極的に行いましたが、そこで関わった学生達が、いずれ優れた音楽家になるための目標に、本学を選択して頂ければと熱望しています。俯瞰的に見ても、この中長期計画は近年少子化の影響を受けてはありますが、根強い気持ちを持って、地域と本学が太いパイプで結ばれるよう一步一步着実に歩み、共により良い音楽活動の発展の場になる事を期待し、関わり続けたいと考えます。地元名古屋フィルとの提携は今年度大きな一歩となりました。今後、「地元地域の大学から地元のオーケストへ！」を掲げ邁進して行きたいです。
管打楽器	准教授	原田 綾子	大学には、正常な授業体制・研究活動が行える環境を、整えてもらいたかった。学生のため、と精神安定剤を服用しながら授業を続け、自分がすり減って行くような職場で良いはずがないと思う。
管打楽器	准教授	橋本 岳人	研究活動では、多数のオーケストラで首席客演を務めた他、室内楽、新曲初演、ソロ活動とバランス良く行う事が出来た。教育活動では試演会を多く開催したことで学生達が切磋琢磨し、実技試験やコンクール等に良い効果をもたらした。また昨年度は多くのフルートコンクール、吹奏楽コンクールの審査員を務め日本音楽界に貢献することが出来た。
教養	教授	二瓶 浩明	本年度のさまざまな目標設定については、これをすべて実現した。 教育・研究については、内外から高評価を得ていることをとても嬉しく思っている。 大学運営や社会貢献についても、大学教員を務めているなら当然のことだと認識。
教養	教授	松野 修	昨年に引き続き、ロバート・ボイルの研究が後の公開科学実験講座に与えた影響について研究を深め、その成果を本学紀要、日本科学史学会、英国King's Collegeなどで発表するとともに、市民講座などでも講演した。大学運営に関しては芸術情報センター長、教職課程の責任者等としての職責を果たした
教養	教授	三宮 敦生	研究方面ではさほどの進展は見られなかったが、教育面では学生の満足度の非常に高い授業を提供できた。そのことは授業評価アンケートの結果からも伺うことができる。また、大学運営面では、教務委員長6年目ということもあり、教務関係の業務の簡素化を大幅に進めることができたのは幸いであった。

教養	教授	水野 留規	<p>芸術と関係が深いイタリア語・イタリア文学の普及に本学着任時より努めてきたが、公開講座などにおいて本学学生に加えて他大学学生や一般県民にも接することができ、10月と1月にはサレルノ大学（海外協定校）との共同企画も予定通り実施することができた（3月にも5人の選抜学生を現地に引率する予定）。そうした活動の中で、EU認可の語学資格検定の導入など、大学の国際化や在校生・卒業生の海外での活動を支援するための課題も見えてきた。これについてはとりわけ語学教員間での議論を深め、事務方とも協議していきたい。外国語授業に関しては、学生の基礎学力が近年下がってきているように感じられるので、有効な方策をより真剣に考えていく必要がある。研究面では教育活動にも関係して翻訳や講読などを進めたが、授業期間中はほとんど研究にあてる時間がとれず、限られた成果しかあげられなかった。大学運営においては紀要委員会の統括、人事委員会における採用人事事務などにかかわった。</p>
教養	准教授	井上 彩	<p>今年度の研究活動に関しては共同研究も含めて国内・国際学会発表3件、論文1本という成果を出せた。教育活動は履修者数が超過した授業も複数あり授業運営と準備に時間がかかったが充実した内容であった。大学運営には委員会を通じてできる限り取り組んだ。週末を利用して日米の国際交流や地域の英語教育のための社会貢献にも励み充実した1年であった。</p>
教養	准教授	大塚 直	<p>平成28年度は、愛知県立芸術大学の創立50周年事業があり、教養教育を代表して記念の芸術講座を行った。現代ドイツの劇作家が描いた〈クシマ問題〉をめぐる問題作を、愛知県の演劇人の協力のもと、本学学生の生演奏を交えて上演した。また学長特別研究費を利用して、精力的な研究活動を行うことが出来た。</p>